

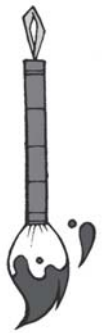
淡墨桜と薄墨桜

筆者は私事で、2月の節分の日にシンポジウムのため奈良の文化財研究所に行ってきました。土曜の午後と日曜日の終日、全国から集まった1000人を超える専門職員が、1300年前の平城京(宮)内の寺院や役所の瓦と国分寺や多賀城など地方の寺院・官衙に使用された瓦の作り方の比較について、喧々諤々(けんけんがくがく)と議論を繰り広げます。奈良にいたるのですがほとんど観光的なことではできず、始まるとほぼ2日間会議室で発表と討論になります。休憩時間は、各地から持ち寄られた実物の瓦を見ながら研究会が進みます。

開始前の僅かな空き時間を利用して久しぶりに西ノ京の薬師寺を訪れました。40年前、中学の修学旅行で訪れたとき、西塔は礎石のみ、金堂が再建されて間もなくの頃でした。80年代の大学入学時には、自転車です15分の所に住んでいましたが、その数年前に西塔が再建、その後、回廊・大講堂が、現在は食堂が再建、東塔が解体修理されています。30年前に幾度も訪れたとき、妙に広々としていた寺院の敷地には、1300年前の創建当時を再現するように伽藍が立ち並んでいます。主要伽藍の北側には、玄奘三蔵院が建立されています。80年代にはこの西側の作業場で、「法隆寺の鬼」と称賛された西岡常一棟梁が槍鉋を使って柱を削っているのを幾度も拝見させていただきました。その玄奘三蔵院には、現存するものでは法隆寺にしかない鐘楼・経蔵と同じ建物が復元されています。礎石の配置、規模は下野国分寺で確認された建物跡とほぼ同等で、国分寺・尼寺跡にVRで復元する時の参考にと思い拝観しました。そこへ行く途中、写経道場の前で薄墨桜の標柱を見つけました。

普段、目にして淡墨桜と文字が違っている？

と。さらにその東の写経道場前には立派な桜の大木。その前には淡墨桜の標柱？となりました。薄墨桜の標柱の裏面には福井県越前市粟田部町花筐公園保勝会の文字。淡墨桜の裏面には、岐阜県根尾谷。でもよく見ると淡墨桜の文字の下に(薄住桜)の文字。これを調べてみたところ、深い歴史(伝説)が判明しました。福井県の薄墨桜は、のちに第26代継体天皇となる皇子が大切にしていた桜の子孫の桜との謂れがあり、樹の周り4.5m余、幹の高さ9m余、樹齢500〜600年の樹です(昭和45年福井県指定天然記念物)。伝説では、この桜はそれまで淡い紅色で匂いは四方に満ちていましたが、継体天皇となる皇子が即位のため都に上った後、地元では花に対する愛玩が薄れ、次第に色が薄黒くなってしまったとあり、このことから薄墨桜と呼ばれるようになったといわれています。また、桜の傍らに「花筐神社」があり、現在のこの周辺は花筐公園となっています。この公園は江戸時代後期の弘化元年(1844)に大和の吉野から数十本の桜を移植して桜の名勝「桜ヶ丘」としたのが始まりで、「なにをかは 春のながめ」といわれいむ 桜ヶ丘の花の曙」と詠われています。この「花筐」の名称は、世阿弥作と伝えられる謡曲「花筐」の題材となった桜とされています。謡曲は、皇子(継体天皇)が都に上るときに寵愛した女性に手紙と花筐(花籠)を届けます。この女性は逢えない天皇への恋情の深さから狂女となつて故郷を飛び出し、都を目指します。都で天皇に再会したとき、この花籠が重要なアイテムとなったストーリーからこのタイトルとなりました。



下野市教育委員会 文化財課

です。

岐阜県本巣市根尾地区の淡墨公園にある樹齢1500年以上の国の特別天然記念物の桜にも継体天皇お手植えの伝説があるようです。継体天皇は皇子の頃この地域に隠れて養育されていたとされ、ここから都に上る際、この桜を植えた歌を詠まれたと伝えられています。「身の代と遺す桜は薄住よ 千代にその名を栄盛へ止むる(みのしろこのこすさくらはずみよちよにそのなをさかえとどむる)」

この桜は蕾の時は薄いピンク、満開時には白色、散りぎわには独特の淡い墨色となり、淡墨桜の名はこの散りぎわの花びらの様子を表した名とされています。作家宇野千代さんもこの記念物の保護を訴えた方の一人です。

どちらのウズズミの文字も間違いではなく、実は歴史的な伝説の中から与えられた由緒ある名称のようです。勉強になりました。「本物の出会い栃木」デスティネーションキャンペーンで、国史跡下野国分尼寺跡の満開の淡墨桜と吉永小百合さんの素晴らしいPRポスターも旅情を誘います。

※伽藍とは、寺院の建物のこと

参考・福井県文化財天然記念物ホームページ、岐阜県本巣市ホームページ

新・下野市風土記2月号掲載記事のお詫びと訂正

2月号「東の飛鳥(飛鳥時代前期)」のふりがなの記載に誤りがありました。お詫びするとともに、左記のとおり訂正いたします。

・4行目の蘇我大臣馬子のふりがなは、正しくは「そがのおおみうま」となります。